

国東と暮らす

ゴールデンウィークに突入した4月26日の朝、キラキラと輝く水田に松原正さん夫妻の姿がありました。今シーズン最初の七島イの植え付け作業の日、約30センチに切りそろえた苗木を田んぼに投げ込むご主人の正さんは、「いよいよ始まったなあという感じです。刈り取りが終わる9月下旬まで気が抜けませんね」と話します。妻の恵美さんは、「この日を迎えられるとても嬉しいです」と微笑みます。午前10時、手伝いに訪れた人たちも加わり、共同作業が始まりました。

一列に並び、腰を曲げ、1株ずつつまんだ苗を泥田に植え込みます。間隔は約15センチ。昔ながらの田植えの光景を思い出しました。



▲左からベテランの松原正さん・恵美さん、新人の淵野聡さん・美由紀さん

全国でオンラインワン

ご存じのとおり、高品質な畳表の原材料となる七島イの生産地は、国内で国東市だけ。かつては国東半島の代表的な産業でしたが、栽培や製織の機械化が難しく、手作業による重労働と天候の影響を受けやすいため、ここ数十年で生産農家が激減。市農政課によると、平成25年度は市内7戸（5農家・2法人）で約93アールの作付でした。



▲手植えを続ける松原正さん

松原さんは市内で最も広い40アールで栽培しており、植え付けは5月末まで続きます。「7〜10日ごとに場所を変えて植え付けます。これは最高の状態で収穫できるようにするためで時期をずらしているのです」と松原さん。植え付けから刈り取りまでの約90日間、防除や梢切という作業をはじめ刈り取りも手作業で行うために、計画

的に進めなくてはなりません。昔から受け継がれている伝統農法は、世界農業遺産登録の大きなポイントの一つです。

メディアで注目、後継者も

この一年、世界農業遺産登録を受けた七島イは、テレビや新聞で脚光を浴びました。しかし、七島イ農家として21年目を迎えた松原さん夫婦は、「私たちは生業としてやっているで、気持ちには普段と変わらないですね。残そう残そう」と強く思うだけでは残るものではないので、地道に続けるしかないと思います。それが、次の世代につながる確実な方法でしょう」と語ります。

実際、後継者もできました。佐賀県出身の淵野聡さんは3年前、妻の美由紀さんの故郷である国東市に移住。松原さんに弟子入りし栽培や製織を学び、昨年からは10アールの水田で七島イ栽培を始めました。「七島イの魅力に惹かれます」



▲期待の七島イ後継者、淵野聡さん

した。苦労もありますが、無理をせずに夫婦で楽しみながら続けていきたいです」と聡さん。昨年初めての生産した畳表は、武蔵町の蓮華寺の本堂に敷かれました。その様子を見届けた美由紀さんは、嬉しくて涙が止まらなかったといいます。松原さんは「淵野さん夫婦が始めたおかげで、興味のある若い人が少しずつ出てきています。七島イ農家の減少に、ようやくブレキがかかりましたよ」と期待を寄せています。「ただ、実際に七島イ農家として生活するには、まだまだ厳しいですけどね」と笑顔で付け加えました。

安定供給とPRが課題

3月20日に安岐町富清の旧西武蔵幼稚園を改装してオープンした「七島蘭學舎」は、七島イの歴史や栽培方法を学ぶことができる資料館です。工芸士が製作した工芸品の数々も展示・販売され、体験教室も始まりました。



▶「今年が本場の意味でのスタート」と語る細田利彦さん

七島イの生産者などで組織する「くにさき

七島イと暮らす

七島イ農家
松原 正さん
(安岐町塩屋)



▲まさしく共同作業。若い人も興味を持ち始めた

七島蘭振興会」の細田利彦事務局長は、「最近では畳や工芸品の問い合わせが増えました。一人でも仲間が増え、きちんと収益が上がる産業にしていきたいのが大きな課題。大分高専で改良された全自動織機をフル活用することが会としての目標です」と、七島イの安定供給とPR戦略に取り組んでいます。



▶工芸品の開発、生産も光が見えてきた

七島イが登場 話題の映画 蛸ノ記

今秋公開

小説家室鱒の直木賞受賞作『蛸ノ記』が映画化され、10月4日に公開されることになりました。

舞台は江戸時代、豊後の国。役所広司演じる主人公は、七島イ生産を奨励する役目。その娘役は堀北真希、その他原田美枝子、岡田准一など豪華キャストが出演。この秋、七島イが全国のスクリーンで注目されます。